

米軍占領とコザの発展 女性の暮らしぶりから見るコザの街

武田 亜沙美

1. はじめに

沖縄本島中部地域の行政・経済の中心として、那覇市に次ぐ第二の都市沖縄市。この地域は古くから「コザ」という愛称で親しまれており、1974年に旧コザ市と美里村が合併し沖縄市となった今でもその愛称で呼ばれ続けている。

コザには沖縄県にある米軍基地の面積の内 7.4%¹⁾ が置かれ、国頭村、東村、名護市、金武町に次いで多くの米軍基地を保有している。このようにコザには広い基地があるため、その基地関係者である外国人が多く暮らしており、その影響を大きく受け、「基地の街」や「チャンプルー（さまざまな文化がまざりあっている）の街」とも呼ばれている。

沖縄県は米軍基地が置かれているが、その中でも特に多くの基地が置かれその影響を大きく受けた沖縄市（コザ地区）はどのような変化を遂げたのか。女性の暮らしの変容に着目しながら探る。その際、コザに住む女性に聞き取り調査を行うとともに、吉原と呼ばれる歓楽街についても現地調査を行った。



地図1 コザ中心市街地（Yahoo 地図情報より）

2. コザとは

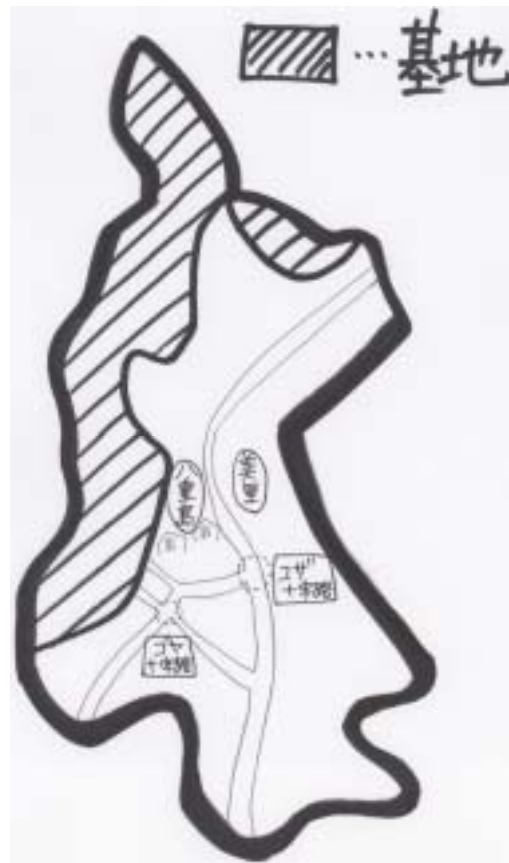
コザとは沖縄本島の中部東海岸側に位置する沖縄市を指す地名である。1945年の9月15日に、米軍の指令により「胡差市(コザ)」となる。米軍の駐留によって生まれた町であり、そのために沖縄県内の中では最も米軍と深いかかわりがある地域として知られている。1972年の日本復帰の際に美里町と合併して沖縄市となる。現在地図上には存在しない地名となっているが、多くの人々はいまだにこの地域をコザと呼んで親しんでいる。

コザには多くの商店街が存在している。しかし最近では、商店街の店はほとんどシャッターがしまっており、昼でも全然活気のない商店街になってしまった。あまりの活気のなさに、商店街は休みなのか?と聞く観光客も少ないという。

なぜこのように衰退してしまったのかというと、本土にも良く見られる現象であるが、郊外にできた大きなショッピングセンターにお客をとられてしまったからだという。ショッピングセンターには広い駐車場があり、交通の便がよく利用しやすい。しかし、商店街では場所がせまいため面積に限りがあり、駐車場を作ろうとはしているものの、敷地の無さゆえにあまり多くの車を収容することはできない。そのため、商店街へのアクセス方法は徒歩や自転車に限られるようになり、どんどん客足が遠のいているのである。

沖縄市はこのような衰退している街を活性化するために、胡屋(ゴヤ)十字路に約70億円近くかけてコザミュージックタウンという音楽と商業の複合施設を建設した。この中にはマンションも入っており、駐車場も設けられている。この土地には元から飲食店などがあったが、その土地を買収してこの施設は作られた。

しかし活性化を目的としているものの、実際は店舗を募集するも全然入らず、写真1のように人が集まることも無くさびしい印象を受けた。地元の人にとってもわざわざ元から



地図2 沖縄市マップ



写真1 ミュージックタウン内部

の人や店を立ち退きさせてまで作るものではないという考えがあり、評判はあまりよいものではなかった。

コザは昔から多くの外国人(米軍関係者など)が暮らしていて、アメリカなど様々な国の文化と日本(沖縄)の文化が混じりあっている「チャンプルーの街」として有名である。その混ざり合った文化の代表の1つとして音楽がある。コザには外国人・日本人問わずミュージシャンが多い。そのような特色を生かすための施設だったのだが、実際は金の無駄遣いとも言われており、それだけでなく昔の飲食店街がなくなったことで、コザらしさを減らす要因にしかならなかったともいわれている。

3. コザに暮らす女性

(1) 銭湯経営 Aさん

城前町で銭湯「中乃湯」の名物おばあのAさん。昭和45年から現在まで48年間Aさん1人で銭湯を経営している。この銭湯はAさんが二代目で、以前は夫が経営していたものの、夫が他界してからはAさんがそれを引き継ぎ1人でここまでやってきたのだという。毎朝7時に起床し準備をして、15時から21時まで営業している。沖縄に銭湯はほとんどなく、ここと越来に1つしかない。よって自分の判断だけで休んでしまうと、全島の客が1つに集中することになるため、うまく2つの銭湯で協力しながらやっているそうだ。今はほぼ銭湯の仕事をこなしているが、夫の生前は夫が銭湯の経営を行い、自分でも洋服直しをして、今も少しながら銭湯の仕事の傍らに洋服直しを行っているそうだ。



写真2 中乃湯のおばあ



写真3 中乃湯 内装

(2) 占領期体験者 Bさん

久米島出身で現在65歳のBさんは、戦後沖縄の激動の時代、特に米軍からの占領期を経験したひとりである。今は国からの補助金で生活しているが、元々はハブ捕りをしてきた。ハブ捕りとは常に気を張っていないとハブの毒など危険なものと隣り合わせの仕事である。今ではハブ捕りの腕を買われて、県から時々ハブ退治の依頼が来るそうだ。

そんなBさんは子供時代に、沖縄が米軍に侵食されていく時代を経験してきた。久

米島に住んでいたとき、叔父がその土地の自警団の団長をやっていたが、日本兵の命令により焼き殺された。表向き、沖縄本島には兵隊はいないとしているが、実際は各家から1人ずつ抜き出されていて、二度と家に帰れることはなかったという。中でもひどいのは、同じ日本人であり、戦場を共にする仲間であるにもかかわらず、一列に並ばされて殺されたり、家に火をつけられ殺されたりしたことである。日本兵にとって地元の自警団は自分たちに刃向かう邪魔な存在であり、そのために殺されてしまったようだ。

そんな悲惨な時代を経験し、いよいよ日本軍が降伏し米軍により沖縄支配が始まった。米兵はいきなり民家に入ってくる人や、暴力を振るう人もいたが、戦争が終わってからは優しい人が多かったという。2、3歳のBさんに対してお菓子をくれることなどあったという。しかし生活は決して楽なものではなく、米兵がかみ終わって捨てたガムを拾って食べたり、米兵が飛行機から飛行場にせっけんなどを落とすので、それをみんなで拾いに行ったりしたそうだ。

このようなつらい生活をしたからこそ、もののありがたみが分かるが、今ではそのような気持ちがなくなっているのが悲しいと言っていた。畑もあまりなく人の畑から盗ってきたり、ガソリンオイルで天ぷらをあげたりなど、食べ物のある今とは全く異なる生活だった。苦しい生活を家族全員協力しあい乗り切ってきたからこそ、家族のつながりがとても強かったそうだ。

つらい子供時代をすごしたBさんは、成長して働くようになると、親や弟・妹たちを養うために働くようになる。この当時お金が入るところといえば飲み屋だけだった。当時はアメリカ兵が多額のお金を飲み代・女代として使っていたためである。ゆえに一日中飲み屋で仕事をするようになったが、弟・妹たちのために始めた仕事でも、彼らが成長して飲み屋がどのような仕事に分かるようになると、今度は弟・妹たちの面目のためにその仕事をやめ、また違う仕事を始めたのである。

このように戦後は女が勤めるとしたら飲み屋、歓楽街くらいの選択肢しかなく、ほとんどの沖縄の女性はこのような場所で働くようになった。Bさんは自分の身を粉にして働き家計を支えてきた。そのため家族、特に親からとても感謝された。このようにまだ10代程度の若い女性が自分の身を犠牲にして働かなければならない時代が、昔の沖縄に存在していたことが分かる。



写真4 占領期体験者Bさん

4. 歓楽街の発展と女性の関わり

(1) 八重島特飲街

現在では沖縄の有名な歓楽街が発展している沖縄市であるが、その始まりは沖縄市の外れのほうに位置する八重島特飲街である。つまり八重島地区が沖縄本島で一番最初の売春地区、いわゆる戦後の赤線地帯なのである。

米軍基地ができて以来、血気盛りの若い米兵による女性の暴行事件が後を絶たなかった。この状況を打破するため、米兵が住民たちと接触しないように隔離政策を行おうとしたが、米兵から報復攻撃として住民地区への放火や殺人事件などが発生した。

そのため、米兵と住民を引き離すことはできなくなった。そこで考えられたのが、郊外に特殊地域を作ってそこを特飲街とすることである。その際選出されたのが、岩山や森によって人目につきにくかった八重島地区なのだ。

八重島地区は、「裏町」とも「ニュー・コザ」とも呼ばれ、米人相手の町として発展していった。1950年6月に朝鮮戦争が勃発したが、この朝鮮動乱の時期が、八重島の特飲街の繁盛期で、百数十軒のバーやクラブに、300人のホステス、その周辺には1000人もの住人が暮らしていたという。

当時は売春目的に米兵も沖縄の女性もこの土地に集まってきた。一方他の土地でも米兵を対象とした店が続々とたてられ、特に基地周辺のセンター通りや喜間良地区などでも活気がみなぎるようになった。そして1953年にAサイン²⁾の発行が始まると、基準に受かろうと各々の店が切磋琢磨して争うようになった。

それと同時に、性病の予防面や衛生面、時には政治面から基準に違反した店舗に対し、「オフリミッツ」(軍人・軍属の立ち入り禁止)を科したため、売春業者はこの解除のために衛生面の向上を徹底して行うようになった。しかし、八重島の古い店舗では十分な対応ができなかったため、次第に米兵の足が遠のき衰退していった。現在特飲街であった面影はほとんど無く、静かな住宅街となっている。

(2) センター通り

八重島でのオフリミッツから逃れるべく、多くの業者が八重島の入り口となっていたセンター通りに店を移転してきた。さらに、オフリミッツの対象となりやすい風俗営業から健全な娯楽の職業へ転職する業者が相次ぎ、1955年にはセンター通りはAサイン飲食店が立ち並ぶようになる。

当時のセンター通りは白人街と黒人街にはっきり分けられていた。センター通りは白人街、今のコザ十字路あたり、胡屋地区は黒人街のようになっていたのである。白人街では白人にあった質の高いサービスが提供されており、黒人街では比較的低下した店がよく出ていた。また、B系と呼ばれる黒人たちが好んで聞く音楽なども胡屋地区では耳にすることができたが、白人街では



写真5 インド洋服店

一切聞くことはなかったそうである。

このように地区が分かれていることから、白人と黒人の溝が深かったことが分かる。間違えて白人が黒人の地区に足を踏み入れれば、何をされても文句は言えない。ビール瓶で頭を殴られたり、集団で暴行を加えたり、そのようなことが逆の場合でも起こっていて、地元の沖縄人はその断絶を当たり前のものとして受け取っていたようである。

このように様々な米兵相手の飲食街として栄えたセンター通りだが、次第に米兵の家族や関係者など他国籍な人々が移住し店を出すようになり、今ではあらゆる国のレストランなどの店が並び、ここが日本であることを忘れてしまうような様子の街になっている。

(3) 美里地区

八重島など別の地区で米兵相手の売春ビジネスを手がける業者が、米兵からの度重なる暴力や黒人と白人との間の連日のトラブル、米兵と沖縄の人の対立、Aサイン・オフリミッツ規制などで嫌気が差し、米兵ではなく、琉球人・日本人相手の売春街として、米軍の廃棄物処理地跡に作られた沖縄の一大風俗スポットが美里地区である。ここは昼も夜も風俗営業を行っており、昼は主婦などが小遣い稼ぎなどパートをする感覚で行っていて、夜は若い女性から年配の女性まで様々な年齢層の女性が働いている。

ここに訪れるのはほとんどが日本人の観光客や沖縄人であるが、一店だけ米兵を相手にしている店があるため、高い外車に乗った米人の姿も見ることができそうだ。その一店以外は「Sorry Japanese Customers Only (外国人お断り)」と書いた看板を掲げている。

美里は普通吉原とも呼ばれ、沖縄市で一番危険なスポットとなっている。ここで働く女性は年齢も様々であるが、その事情も様々である。手っ取り早くお金が稼げる、割がいいからと自分から進んで勤めてくる女性。たまたま吉原に迷い込むなどして、暴力団に捕まり理不尽な借金を背負わされて、その借金返済のために仕方なく働く女性。戦後生活が苦しい時は、生活資金とするために売るものが自分の身しかないため、このような歓楽街に



写真6 夜の吉原



写真7 昼の吉原

身を投じる女性も少なくなかったという。一方アメリカ人が好きなアメ女という売春婦も存在していたようであるが、逆にアメリカ人に暴行され世間から排除され仕方なく働く女性もいたようである。

以前はそのように暗い背景を抱える女性が多く、少し重苦しい印象だった歓楽街も今の様子は異なっている。わざわざ本土から働きに来る女性もいるくらいなので、どの店も華やかで活気づいているように見えた。どの店も前面がガラスの扉などとなっていて、中に座っている女の子が見えるようになっている。それを車または徒歩により物色し、自分の好みの女性を見つけ交渉するのである。扉やカーテンが開いているときは空いているという意味なのだが、閉まっていれば今客がいるということになる。

値段は 15 分 5000 円となっており、店側が 2000 円、女性が 3000 円の取り分である。これは他の都市にくらべてやや安めである。しかしこのような値段は女性との交渉によって初めて知り得るのであって、店頭には一切記載されていない。女性も自分から男性に声をかけることは絶対無い。なぜかというと、この二点をあからさまにしてしまうと警察からの取り締まりの対象となるからだそうだ。警察もこの吉原で売春業が行われているのはわかっているが、黙認している状況であるらしい。

店にいる女性は雇われているので安全が保障されているのだが、年齢や見た目などにより店にやとってもらえずあぶれた人は、吉原の外れで 1 人立っていて客待ちをしている。年齢や見た目に問題がある分値段は安めだが、店をもっていないのでホテル代もプラスして払うこととなり実際はあまり変わらないようだ。

店でも客待ちとして立つとしても特別な許可が必要だという話を聞いた。吉原全体をしきっている組織があるそうだが、その組織の許可なしには立つことさえできないそうだ。外れにおでんというのれんを下げた屋台があるのだが、そこで団員がもしものために待機して、店の安全を保障しているらしい。また、夜 11 時くらいになるとバイクに乗って店を回り、借金の返済として金を回収したり、薬を売ったりしているようだ。実際吉原にいる女性の中でドラッグ中毒になってぬけられないために働いている女性もかなり多く存在するようである。

5. おわりに

私は調査に行く前まで、沖縄には米軍が一方的におしかけてきているため、治安や騒音などいろいろな面で被害を被っているのが、基地は無くすべきだと思っていた。しかし、今の沖縄市の発展は米軍基地(米兵)なしでは成り立たなかったものである。現在でも様々な問題が生じているが、もし今基地をなくせば、基地からの収入に依存している人たちの生計が成り立たなくなるかもしれない。よって一概に基地は悪いもの、排除すべきものと考えられないと感じた。

今回は女性だけにしぼって調査を行ったが、沖縄の女性は本土の女性に比べ強いと感じた。沖縄の地上戦を経験し、そこからはいあがるために女性の奮闘が不可欠な世の中であったから、女性はより強くなったのではないだろうか。夫の死後もその仕事

を守り抜く女性、1人でも店を切り盛りする女性、戦後の苦しいときに自分の身を粉にして働き生計を支え、現在は1人暮らしながら地域との密接なコミュニティの中暮らししている女性。このような強い沖縄の女性がいたからこそ今の沖縄があるのだろう。

この場を借りて、貴重なお話を聞かせていただいた皆様、調査に協力していただいた皆様に感謝いたします。

注

- 1) 沖縄県による米軍基地の専用施設の面積は、全国の米軍基地の75%を占める。沖縄市の面積は4,900万㎡で、その中で米軍基地が1,761万㎡(市面積の約36%)を占めている。
- 2) Aサインとは、米軍の軍人・軍属の健康と福祉の増進を目的に、一定の認可基準を設け、それに合格した店に与えられる「許可」を意味する「APPROVED」の頭文字をとったものである。このころドルの価値は著しく高く、米兵が一晩に使うお金で家が一戸買えるとまでいわれていた。そのためどの店もAサインもらおうと必死だったのである。

参考文献

- 沖縄国際大学文学部社会学科(1994)『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』榕樹社
波平勇夫(2006)「戦後沖縄都市の形成と展開—コザ市にみる植民地都市の軌道—」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』9-2
野村旗守(2006)『沖縄ダークサイド』宝島社
花村萬月(2007)『沖縄を撃つ!』集英社

参考ウェブサイト

- 沖縄市観光サイト <http://www.koza.ne.jp/>
Yahoo 地図情報 <http://map.yahoo.co.jp/>